

## 豊臣秀次公誕生の地と一柳直末公戦没（討死）の地を訪ねて 会員 西川秀夫

### 1、豊臣秀次公誕生の地といわれる「あま市（旧美和町）」を訪ねて

梅雨が明けた頃、ご縁あって、NPO法人秀次倶楽部の会員の皆様達と豊臣秀次公の生誕地と云われる「愛知県あま市（旧美和町）」の「(大字) 乙之子」の「貴船社」を訪ねた。秀次公の出生地については諸説あり、「大高村」説と「乙之子村」説があるが、「武功夜話拾遺」では父の三好吉房（前身は三輪次郎兵衛または弥助と称した尾張三輪氏の一族）と母の智（日秀院）が住んでいた「尾張国海東郡乙之子村」が信憑性が高く有力である。両親の居住地が、子供の出生地になることは当然である。「乙之子」には貴船社が鎮座しており、この社には父の吉房が天正20年（1592）に関白秀次の武運長久を祈願して社殿を建立したと明記された棟札が残されている。一方、大高村居住説ではいまだに根拠になる資料が発見されていないことから、私達は乙之子説を信じて訪れた次第である。地元の人に話を聞くと、大字乙之子地区には、今もなお「お屋敷」と呼ばれる地名が存在し、同地が昔は「侍屋敷群」であったという伝承も残されているという。このことから恐らくこの周辺に秀次公の生家があったのではなかろうか。同地における記録が今は何も残されていないのは、残念なことであるが、あえて地元民が権力者だった太閤秀吉を恐れて秘したものと考えられる。と、あとで訪れた「美和歴史民俗資料館」の学芸員さんからお聞きした。この「美和歴史民俗資料館」から車で2～3分のところに（大字）蜂須賀（村）があり、ここには蜂須賀城址や蜂須賀小六正勝の屋敷跡がある。蜂須賀家は鎌倉時代からこの地に居住した豪族であったらしい。また、そこから東に（車で）2～3分の「二ツ寺」という字には福島正則の生誕地碑や供養塔が建立されている。江戸時代の「寛政重修譜家譜」には彼の父である福島市兵衛正信が尾張国海東郡二ツ寺に暮らしており秀吉に仕えたとある。福島正則の母は豊臣秀吉の母「なか」の妹と云われる。「二ツ寺村」には昭和初期まで「おみよ屋敷」と呼ばれる土地があつて神聖視されていたが、現在は宅地化されて往時の面影はないという。今はそこには福島正則生誕地の碑が建つのみであった。

さて、秀次の父三好武蔵守吉房（三輪次郎兵衛）であるが、「武功夜話」では奈良から流れて伊勢の豪族北畠氏に仕えた譜代の家系でれっきとした武士であったとされ、吉房の兄は三輪五郎左衛門吉高で北畠氏の被官であつて、のちに信雄公より犬山城を賜る。と記録にある。その兄五郎左衛門の娘に「大匠院（三輪松）」がおり蜂須賀正勝に嫁ぎ、家政の母（黒衣の宰相・東岳禅師）となるのである。

秀次公の父方の家系は武士であることが分かった。一説では秀吉に仕える前までは「鷹匠」であったという記述もある。では、母「とも」の家系はどのようなのだろうか。智（とも）は秀吉と同じ父をもち母は「なか（大政所）」である。弟妹の秀長と旭は同腹だが父が異なる。そこまでは通説どおりだが、貧農ではなかった。「なか」は尾張国愛知郡御器所村に生まれましたが、父は美濃の関鍛冶で小土豪でもあつた関弥五郎兼員である（兼貞・兼定とも云われる）。仲の姉は杉原家利（お寧の養母の父）に嫁いでおり、妹に栄松院（小出秀政の正室）姉妹に松雲院（福島正則の母）従姉妹に伊都（加藤清正の母）がいて、もう一人

の妹（三女）は青木氏（青木重矩・青木一矩の父）に嫁いでいます。一方、智（とも）と秀吉の実父である「木下弥右衛門」は「尾張国愛知郡中村」の村長（村役人で小土豪）であったと伝えられる。領主である織田家からの過酷な年貢徴収に苦悩しながら自らも戦場に出て負傷し数年後に病死したそうです。秀吉が2歳の時に母の仲が竹阿弥（水野昌盛・秀長の実父）と再婚しましたが、この義父と秀吉は生涯不仲だったといえます。竹阿弥は元々武家（水野氏）の出身で、織田信秀の同朋衆（芸能・雑用を担当した）を務めていたくらいですから、かなり教養が深かったものと想像します。実子豊臣秀長の理性あふれる生涯を見ても、この父親の知性がうかがわれます。宮内庁所蔵の中興武家系図等によると、豊臣秀吉の旧姓木下氏は、秀吉の曾祖父である近江国浅井郡丁野村在住の昌盛法師が、還俗（木下弥助国吉に改名）して尾張国に移住した時に生まれたそうです。その後、国吉の子の木下弥助昌高→昌高の弟の木下右衛門尉吉高→吉高の子の木下弥右衛門昌吉（秀吉の実父）と続く過程で、尾張国愛知郡中々村（なかなかむら）の村長を務める小土豪として定着していったそうです。国吉は近江浅井家の庶流の出であるという説もあります。いずれにしても、姓名が定かな身分であった事がわかります。豊臣秀吉の出自については、従来の小説・伝記の中でも説明がある通り、尾張國中村の貧農（小作人）の息子とされてきました。そのため、秀吉には元々姓がなく、「木下姓は、妻のお寧の実家の姓を譲り受けたものである」とまでと言われてきました。しかし、様々な史料や記録を見ていくと、秀吉の父親である木下弥右衛門昌吉は、尾張国愛知郡中々村を束ねていた村長（村役人）であったことが明らかになってきました。貧農の出という設定は、おそらく太閤記などにおける秀吉の出世物語を強調するための脚色であったものと思われる。

当時の16世紀前半の戦国大名の家臣とは、信長以降の「城下町に住み、常に戦闘に備える専門職」ではなく、領内の農村を経営する土豪であり、従って村役人をも兼務していました。秀吉の父親も、尾張国における土豪の一人だったという訳です。

地元中村に古くから伝わる伝承を研究された郷土史家の著書や『武功夜話』によると、「智」とその家族について、次のように記述されている。

【秀吉より3歳年上ですから、織田信長と同じ年に智子は誕生しました。智子の父親木下弥右衛門昌吉は、尾張国愛知郡中々村の村長（小土豪）で、母親仲の実家も関氏という苗字をもった小土豪だったと聞いています。ところが、6歳の時にこの父親が戦の負傷がもとで亡くなり（若年性痴呆症になったため、とも言われてる）仲は智子と秀吉を連れて竹阿弥（水野昌盛）と再婚します。以後姉弟は、この義父の養育により成長していき、異父弟秀長と異父妹旭も誕生します。

智子が何歳の時に結婚したのか定かではありません。しかし、相手の三好吉房（1522～1612・当時は三輪次郎左衛門）の兄の娘が蜂須賀小六の妻であることから、小六と秀吉の仲介の可能性があり、秀吉が20歳頃に小六と知り合ったとして、智子は23歳・24歳の時に結婚したものと推定しますが、かなりの晩婚だったようです。吉房は非常に学問好きであったと伝わっています。】

さて、ここで登場する竹阿弥こと水野昌盛ですが、秀長実父である竹阿弥の出自については、尾張国刈屋城主である水野氏の庶流の出であることが分かっています。織田信秀の茶坊主をしていましたから、さすがに貧農の娘との再婚はありえない。仲の実家及び木下家の家格が一定以上のものであったことによる婚姻のはずです。ところで、徳川家康の実母である於大の方（伝通院）が、三河国刈屋城主の水野忠政の娘であったことは良く知られているところです。その忠政の曾祖父にあたる水野貞守という人物が、15世紀中頃に尾張国緒川に拠点を置いたのが水野氏の始まりだそうです。貞守には水野甚五右衛門為善という弟がおり、その為善の孫である水野藤次郎為春は尾張国春日井郡迫間村に移住し、男子ができます。その男子が、豊臣秀長・旭兄妹の実父である竹阿弥こと水野昌盛です。（『百家系図稿』より） 何と、秀長・家康の両雄は遠い親戚同士であり、秀長の妹の旭は、結果的に遠い親戚である家康と再婚したということになります。

ところで、再三登場する『武功夜話』は豊臣秀次の家老で、秀次事件で賜死した前野将右衛門長泰（蜂須賀小六と同時期に秀吉に仕えた墨俣時代からの古豪）を主人公にした安土桃山時代の尾張国土豪の「前野家家譜」で古文書である。長泰・景定親子とも秀次謀反で連座させられ切腹し、なおかつ細川忠興とガラシア玉の娘（御長）が長泰の嫡子景定に嫁いだ関係で、前野一族はキリシタンだったということから人目につかないように伝えられてきたのが前野家文書でその一部が刊行されたものを『武功夜話』というのである。（こんなことは歴史を知る者にとっては常識でしょうけれど。）

## 2、一柳直末公戦死の地「山中城址」を訪ねて

さて、一路東名高速を飛ばして次に訪れたのは静岡県三島市山中の「山中城址」です。ここは、豊臣秀吉が小田原合戦で後北条氏を攻めた時、羽柴秀次の軍が受け持った処です。秀次公はこの山中城と葦山城を攻めてこれらを落城させます。石田三成が忍城（のぼうの城）を攻め落とせなかったのはえらい違いです。しかし、秀次もここ山中城攻めで、一柳直末という大切な家臣を戦死させてしまいます。秀吉はこれを聞いて落涙したと伝えられています。この一柳氏は美濃国の厚見郡西野の豪族（土豪）ではじめ齋藤氏に従属していたが齋藤義龍のころに齋藤氏を離れ織田信長に仕えます。一族の多くは羽柴秀吉に付属させられ、そのまま秀吉の家臣となります。直末の父直高は晩年に本願寺の門徒となり、一柳直高の没後（天正8年 52歳）、その墳墓のそばに一寺が建立され、現在の本願寺岐阜別院となっている。また、直末戦死の報を秀吉に伝えたのは黒田官兵衛だと言われるが、黒田官兵衛の妹は秀吉の播磨攻めするとき、秀吉の媒酌により一柳直末と結婚している。同じころ蜂須賀小六正勝の娘（糸）も黒田長政と結婚している。一柳直末には2女1男がいたが直末戦死の後には、妻子とも黒田家に引き取られた。2女は他家に嫁し、1男は早死したという。そのため家督は直末弟の直盛が相続し、江戸時代も大名として残った。その一柳氏の子孫の一つが小野藩一柳家で、その幕末最後のお姫様（元小野藩主一柳末徳子爵の三女）だったのが「一柳満喜子」さんである。云わずと知れた「ウイリアム・メレル・ヴォ

一リズ」氏の奥様である。再び縁のある近江八幡に一柳氏が330年？ぶりに戻ってきたのでした。余談だが、現在の仲屋町は昔は市助（介）町と呼んでいたが、その市助（介）は一柳直末の別名である。福島正則が福島市松、加藤清正が虎ノ助だったように、秀次の家老だった中村一氏が孫平次（地名で残るのは、この孫平治町ぐらいか？）田中吉政が現大杉町を久兵衛町といった具合である。田中吉政（高島市田中の出身、宮部継潤の家臣だったが主君の養子になった秀次に付いて家老となった）などは、西の湖から八幡堀を掘削し、信長の作った下街道（現京街道・朝鮮人街道とも言う）を八幡城下に通らせ、背割排水など八幡城下の町割を采配した人物として有名です。後に岡崎城や筑後柳川藩主として移封されたときもこの手法を活用しています。一柳満喜子さんも先祖の一柳直末公同様に近江八幡の発展に寄与して下さいました。

さて、「山中城」ですが、現地に行って驚きました。中世の山城として国の史跡に指定され、「障子堀」や西の丸大橋、本丸跡などが綺麗に整備されていました。もちろん一柳直末公の墓もありました。三島市のボランティアガイドの方にお聞きしたら、直末公の首塚なるものが静岡県長泉町にあるそうで、直末の従者の留兵衛がこの地に首を埋めたようです。またこの公園は昭和5年に国の史跡に指定され三島市が昭和45年から公園として整備したようです。しかも、国の史跡指定に奔走尽力されたのが子爵であった「一柳貞吉」という人物だと聞かされて二度ビックリしました。宗閑寺の近くに彼の建立した碑があります。恐らく一柳直末公にゆかりのある方だと思います。ガイドの方に尋ねても分からんということだったので後で自分で調べてみることにしました。山中城址からすぐのところには葦山城址がありましたが、そこは宅地開発されて住宅地の真ん中にある感じで普通の公園と変わりませんでした。そこで世界遺産となった「葦山の反射炉」をついでに見学しました。さすがに観光客が殺到していました。帰りの道中に「蛭ヶ小島」（源の頼朝が流罪になった地で北条政子と出会った場所）があったのでそこも見学して帰路につきました。小島だから中州か海岸を予想していたのですが、今は埋め立てられていて公園となり碑があるだけでした。やっぱり見応えがあったのは山中城址でしょうかね。一見の価値はありますよ。三島市のボランティアガイドも頼めます。では、そこまで公園整備を提唱した「一柳貞吉」氏とはどういう人物なのか、いろいろと、あとで調べてみました。国立国会図書館に「一柳家史紀要」という本が残されていることを人づてに聞いて調べてもみました。一柳直末の戦死の後、家督を継いだのは弟の直盛ですが、直盛亡きあとは三人の息子に領地が分けられ長男の直重は伊予西条藩主として宗家になり、二男の直家は播州小野に一万石、三男の直頼は伊予小松に一万石賜ったとある。この二男の直家の末裔に広岡恵三や一柳満喜子さんがいる。伊予小松藩も播州小野藩も明治維新まで生きのびるが廃藩置県により華族として列せられている。ただ宗家の西条藩一柳家は直重の子の直興のときに幕府から不届きの件あり領地没収、金沢の前田家に預けられ、その後には赦免されたが家督は弟の直照が継いで、5000石の旗本となり宗家を存続した。その子孫に一柳貞吉（さだきち）氏がいることまで分かった。また調べる過程で分かったことだが、一柳直末・直盛の父である直高は

本願寺 11 代顕如上人が岐阜に来た時に門徒と成り彼の没後、その地に 1 寺が建立され、それが今の浄土真宗本願寺派本願寺岐阜別院であることも分かった。また、直高の弟（藤兵衛）の子に一柳右近将監（一柳可遊）がいるが秀次事件で連座して切腹させられている。もし、一柳直末も山中城で戦死しなかったら、秀次事件に連座して賜死していたかも分からない。そうであれば今のヴォーリズ学園・近江兄弟社もできなかったかもしれない？歴史とは不思議なもので、興味は尽きませんね。

あま市にある貴船社（秀次公生誕地）



山中城址公園



山中城址（西の丸大橋）



山中城 障子堀



山中城址（障子堀）



一柳直末公の墓



